

湯島聖堂神農刻像の縁起と沿革

○学僧奮然による中国将来の伝承

湯島聖堂神農廟に安置されている神農刻像は今を去る一千年前、僧徒六人を率いて宋に渡った大和東大寺の学僧奮然が、寛和三年（九八七）釈迦像や經典などとともに持ち帰った中国将来の作品で、日本最古のものと伝えられてきた。しかし、奮然が将来したとするこの伝承は確証を欠いたまま推移してきた。

○神農刻像背扉より新しい記録の発見

一方、同じく奮然の将来したとされる釈迦像は、今日まで京都嵯峨野の五台山清涼寺に護持されているが、昭和二十八年その胎内から中国よりの将来品やその目録が発見され、学術調査が行なわれた結果、その事実が確認されて釈迦像をはじめ胎内物は国宝に指定されるに至った。しかし、その目録からは神農刻像の記録は遂に発見されなかった。このように、伝承に確証が得られぬことにかねて関心を寄せられていた矢数道明北里研究所付属東洋医学総合研究所名誉所長（医博・文博）は、中国の関係方面研究家に神農刻像の写真を送り、調査と意見を求められた。その結果、「宋史」列伝の奮然の事跡に釈迦像の将来に関する記録はあるが神農刻像の記録は無いこと、また、宋代の作品と断定するのは困難であるが、背扉に何らかの記録がある筈との示唆が寄せられた。昭和五十九年斯文会並びに同博士により神農刻像の背扉が開かれたところ、その裏面から全く予想されなかった記録が発見された。そこには三代將軍家光が寛永十四年（一六三七）雑司ヶ谷の地に薬苑地を定め、家光の発願により初代薬苑主山下宗琢が神農刻像を製したものであって、直接の作者は明石清左衛門藤原真信であり、同十七年（一六四〇）これを安置すると記されていた。この記録にある薬苑や苑主宗琢については史実に明らかとなつてはいるが、作者については現在のところ確認が得られず、なお、調査を必要としている。しかしながら、右に述べたように奮然関連の資料に確証がないことと、この新事実の出現により奮然将来伝承はほぼ崩れたことになり、神農刻像の縁起は家光発願によることに定まってきたといふことができる。

○聖堂安置から遷座、遷座まで

五代將軍綱吉は、元禄三年（一六九〇）湯島の地に聖堂を創建したが、同十一年（一六九八）雑司ヶ谷薬苑地に護国寺を建てたため、聖堂敷地東北の位置

に神農廟を設け、この神農刻像を移し安置した。その後、寛政九年（一七九七）將軍家齋の侍医・多紀元惠の要請で神農刻像は神田佐久間町の醫學館（官立の医学学校、前身は父元孝の創立した躋壽館）に遷座した。以後、春秋に祭儀（官祭）が行なわれ、歴代將軍の崇信も篤く明治維新に至った。

明治元年（一八六八）神農刻像は新政府の官物として農商務省博物局に陳列されることになり、祭祀は途絶えた。このことを憂えた温知社の代表浅田宗伯らは、その経営する温知塾（初めは和漢医学講習所）に安置し、皇漢医方の始祖として祀ることを願って下賜を願い出たが許可されず、ようやく模刻のうえ返却するという条件で神農刻像は明治十六年（一八八三）日本橋本町の温知社に遷座した。

明治二十年（一八八七）温知社は経営困難から解散となり神農刻像は許可を受けて一応浅田宗伯の屋敷に遷された。そのうえで、宗伯はあらためて下賜を願い出たところ東宮侍医としての公職や東洋医学に尽くした功を認められて同年十二月許可され、神農刻像は宗伯の所有するところとなった。

大正に至り十二年（一九二三）の関東大震災で浅田家の神農祀堂が壊れたことや同家の医系が絶えたこともあって、神農刻像は同年宗伯の高弟である木村博昭の本郷曙町の自邸に移され、さらに十四年には博昭は本郷富士前町に居を移し、立派な祀堂を築いて安置した。

昭和十七年、木村家を嗣いだ養子木村長久は太平洋戦争で軍医として応召する際、神農刻像の将来を考へ関係者と協議した結果、元の廟所である聖堂に移すのが最も所を得たものとして、斯文会に寄贈を申し出た。斯文会はこの申し出を納れ、遷座を完了したうえで所管の文部省に献納することを願い出た。戦争末期の困難の中ではあったが移築工事は無事完了し、十八年（一九四三）七月、百五十年ぶりに神農刻像は聖堂に遷座した。

○戦後の神農祭行事

戦後、神農祭は昭和二十八年（一九五三）九月二十八日、本会の主催と神農奉讃会の前身である神農史蹟礼賛会の協賛によって復活した。孔子祭、先儒祭とともに聖堂の三大行事の一つとして、現在は勤労感謝の日の佳辰に行なわれ、奉讃団体も十を数え、神農を顕彰する記念講演会も併せ開催している。因みに、平成十年（一九九八）には、神農刻像が雑司ヶ谷からはじめて聖堂に安置されて以来三百年を迎えている。